



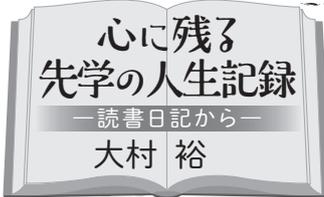
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.243
2023.12.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第37回

『江藤千鶴考古学論集』

(沼津市教育委員会 2009年)

本書は溢れるばかりの才能を有しながら、大東亜戦争末期にわずか28歳の若さで戦死した考古学者・江藤千鶴(1917~1945)に関する論集である。江藤が著した諸論文・エッセイ、彼の業績一覧・主要論文解説、そして設楽博己氏による「江藤千鶴の人と学問」ならびに江藤の年譜からなっている。巻頭には江藤にちなむ貴重な写真集が掲げられてある。

江藤が論文を旺盛に執筆したのは何と國學院大學在学中であった。江藤の学問を育んだ当時の國學院はどのようなところであったのだろうか。江藤の2年先輩にあたる稲生典太郎先生から私が伺った、先生在学中(1930年代)の雰囲気をも紹介しておこう。

〈当時、私学で常勤の考古学研究者を教員に抱えている大学は國學院だけであった。ただし、僕が國學院大學予科に進学した時は、鳥居龍蔵先生は國學院を退職していた。かわりに教鞭を執っていたのは大場磐雄先生であった。大場先生は神道考古学の大家ではあるが、古物を一つひとつ説明する鑑定家のような学風で、「組織」がなかった。大場先生が赴任してきたときの講義では、土器編年に触れることさえしなかった。これに飽き足りない学生たちの多くは森本六爾さんが主宰する東京考古学会に参加した。國學院では、「森本のところに行かなければ若手考古学者ではない」とまで言われていた。一方、山内清男さんに対しては、すぐ癩癩を起こすので、國學院の間中は怖がって敬遠していた。山内さんのもとに足しげく通っていたのは僕だけ(註)。江藤君や長田君も北伊豆の報告のときには山内さんの指導を受けていたが、基本的には森本さんの下にいた〉

新しい方法論の出現によって高揚していた縄紋土器研究や弥生土器研究に若い学徒が夢中になっているとき、國學院ではそうした要望に応える体制がまだ整っておらず、学生たちは自ら得た資料や、外から仕入れた情報をもとに、侃々諤々の議論をして自らの学問を鍛えていたのである。江藤の学問はそうした環境の中で醸成されたものと推定される。ここでは、彼の人格や学問の特徴を、本書収載の設楽博己「江藤千鶴の人と学問」を参照し、纏めてみる。

江藤千鶴は大正6(1917)年、アメリカ合衆国ワシントン州のヤキマ地方のワバトというところに生まれる。父母は開拓農民であったようである。二人は勤勉であったため成功し、裕福であったようだ(巻頭図版には正装して自動車に乗っている家族写真がある)。母の意思で幼児期に洗礼を受けたという。一家は千鶴の就学年齢に合わせて帰国。そのため、小学校に入学するまで江藤は日本語が上手でなかったという。幼児期を米国で過ごしたこと、クリスチャンであったことは、江藤の人格形成に多大な影響を及ぼしたと想像される。

昭和5(1930)年、静岡県の旧制沼津中学に進学。ここでは「歴史科」(後年「愛南考古学会」と改称)に所属し、駿豆地方120の遺跡を自ら踏査したという。江藤による後年の論文の多くは既に中学校時代に基礎が出来上がっていたと設楽は推測している。江藤が5年生のとき、学友会誌

に寄稿した「沼津近郊に於ける縄紋式石器時代概論」は、とても中学生(現在の高校生)が書いた論文とは思えないほど堂々としたものである。幼児期に英語に慣れ親しんでいた彼は、この論文において、権威ある邦文の書籍のほか、英文の書籍(N・G・マンローの“Prehistoric Japan” やジョゼフ・デニカーの“The Races of Man”)も参照している。

このように、相当な実力を携えて國學院大學の予科に入学する(1935年)が、上記の稲生の証言を参照する限り、大学の授業には少なからず失望したのではないかと想像する。学外の森本六爾や山内清男のもとに走ったのは必然であった。しかし学内にあった上代文化研究会に入会したことは、江藤にとって限りなく大きな支えになったことであろう。この会には七田忠志・長田實・乙益重隆・北構保男・島田暁・岡本健児・佐野大和など錚々たるメンバーが集っていた。彼らは大学の考古学資料室にたむろしていて、そこはあたかも「梁山泊」のごとき様相を呈していたという。ここで彼らは互いに切磋琢磨したのであった。

この研究会所属メンバーの活動で、とくに現在も話題となるのが、「古式縄紋土器群」を求め、5日間にわたって北伊豆一円を江藤・長田・乙益が踏査した一件である(1936年12月)。彼らは、「だらだらと続く単調な山の中の坂道を」、疲れ果てながら遺跡を尋ね歩いたという。その、「口も利けない疲労の極」にあった彼らを鼓舞したのは、乙益が「吹奏する抒情味豊かなハーモニカ」であったと報告書で述懐している(「北伊豆に於ける古式縄紋遺跡調査報告」『考古学』10巻5号)。情景が脳裏に浮かぶような、感動的な一節である。

さて、江藤は基本的に森本六爾の下にいたと稲生は証言している。彼の弥生式関係の論文には、問題意識も方法論も森本のそれが色濃く窺われる。気難しい山内清男が、これをよく許したものである。その理由は、江藤の人格によるものであろう。例えばこんなことがあった。彼は入学早々、「駿河国沼津を中心とする弥生式異形石器に就て」という論文を発表している(『上代文化』13輯)。縄紋式の石棒に近似するものの、体部が膨大する徳利状の異形石器である。江藤はこれを「弥生式石棒又は宗教的対象物」と推察するが、その直後、藤森栄一は、同種遺物を広い地域にわたって概観した後、用途に関わる種々の説(江藤説も含む)を紹介し、「素人くさくて、失笑に値する」と酷評している(「弥生式末期に於ける大型石錘」『考古学』7巻9号)。江藤はこの酷評に、くさるところが直ちに撤回論文(「弥生式末期に於ける原始漁撈聚落」『上代文化』15輯)を公表する一方、「小包」のように長大な手紙を藤森に送って「弟子にしてくれ」と懇願する。藤森はこれに感激して「心の友第一号」としたという。この、純粋で率直で、学問一途の姿勢が、山内清男に愛された所以であろう。

江藤は大学卒業後、程なくして応召。そして昭和20(1945)年6月、銃創を負った上に疫病に罹った江藤は、沖縄の摩文仁にて、二人の部下と共に米軍に突入する。

註 この部分は稲生先生の記憶違い。1級上の宮崎礼も山内とかなり親しく交際していた(宮崎「私の考古ボーイ時代」『多摩考古』21号)。

*巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第37回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第236回)	池田裕英 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第12回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4」	直井雅尚 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第12回)

山本 暉久

12. 大学院での考古学 その1

1970(昭和45)年4月、大学院に進学し、修士課程に進むこととなった。学部4年生は卒論に取り組んだ1年間で、発掘はご無沙汰していたが、進学とともに再開することとなった。その話の前に、前年の1969年7・8月に行った長野県小県郡長和町和田峠周辺の遺跡踏査について触れてみたい。早稲田大学の先輩であった金井典美さんが病氣療養と山歩きのために仲間と建てた八島湿原の入口にあった「クラブゆうすげ小屋」を宿舎として、八島湿原を抜けて鷲ヶ峯を登り和田峠の黒曜石原産地を訪ねるのがその目的であった。今は、代替わりして、宿泊施設兼カフェ「ヒュッテ御射山」となっていることをネット検索して知った。金井さんは、1928(昭和3)年生まれで、1960(昭和30)年、早稲田大学文学部國史専修を卒業された大先輩であった。八島湿原の末端にあった「日本のオリンピック」ともいわれた巨大なコロシム状の階段遺構をもつ「旧御射山(もとみさやま)遺跡」を1963・64(昭和38-39)年、発掘調査したことで知られる。その遺跡近くに、1956(昭和31)年、ゆうすげ小屋が建てられた。その経緯などは、『御射山』(1968.7, 学生社、表紙写真参照、裏表紙中央が金井典美氏)にくわしくまとめられている。黒曜石の原産地として知られる和田峠では、当時建設が進んでいたビーナスラインの工事現場の切り割りの崖面に露呈していた旧石器を採集することができた。その資料報告は、「長野県和田峠発見の石器新資料」(古代第53号, 1970.3)として掲載されている。資料報告ではあったが、自身のはじめての活字となったものであった。

話はいささか横道にそれるが、霧ヶ峰高原へ向かうのは、中央本線の上諏訪駅が起点であった。その帰りであったか、駅舎の待合室で、アポロ宇宙船が初めて月面着陸した模様がテレビで放映されていたのを思い出す。上諏訪といえば、金井さんに同道して藤森栄一先生が経営されていた旅館「やまのや」を訪れて藤森先生にお会いできた思い出がある。敬愛する藤森先生にお会いできたことは喜びであった。

さて、大学院進学後の発掘調査について触れてみたい。進学早々の1970(昭和45)年4月に入って、渡辺誠先生が担当者となって実施された川崎市初山遺跡の第3次調査に参加した。縄文中期の集落址であり、渡辺先生門下である各大学の同世代の学生たちが多く参加した調査であった。とくに「西1号住居址」とされた住居址は、柄鏡形敷石住居址で、後に当時京都の平安博物館(現・京都文化博物館)に勤務されていた渡辺先生を訪ねて、報告書刊行前に遺構図面をトレースする機会をえた。その図は、私のはじめての論文となった「敷石住居出現のもつ意味(上)(下)」(古代文化28巻3・4号, 1976. 2・3)に掲載することができた((上)第10図2, 27頁)。また、その時調査された16号住の南東隅の床面上から検出された倒立状態で出土した連弧文様をもつ深鉢形土器に興味を惹かれた。この土器は胴下半部を磨り切った状態を呈し、のちにこの点に着目して、「住居跡内に倒置された深鉢形土器について」(神奈川考古第1号, 1976.4)と題する論文を発表している。

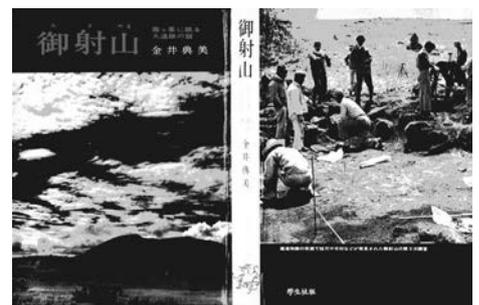
8月に入って、菊池義次先生(当時・頌栄高校教諭)が大田区

史考古篇の編纂に携わっておられ、先生が中心となって、久ヶ原遺跡の学術調査が実施されることとなり、これに全期間参加した。遺跡はいうまでもなく、弥生時代後期「久ヶ原式土器」の標識遺跡として知られる。予想どおり、久ヶ原式土器を伴う竪穴住居址群が検出された。余談だが、調査の終了間際に遺跡の全景写真を撮る段階になって、その日、突然たくさんの葬儀の花輪が、遺跡の背後にある住宅前に並び立てられたのには参ってしまった。調査の報告が載った「大田区史資料編考古1」(1974)には、その花輪がずらりと並んだ遺跡全景写真が掲載されている。調査後、報告のため遺物整理を秋口にかけて文学部中庭にあった整理室に通い詰めて行った。菊池先生からは、南関東弥生後期土器の型式変遷観を直にくわしく教わることができたのは幸いであった。また、同じ大田区史の編纂に関わって、翌年の1971(昭和46)年3月、大田区田園本町にある下沼部貝塚の調査に参加した。岡田威夫先生を中心とした調査で、晩期を中心とする遺物が多く出土した。

4月には、平安博物館の渡辺誠先生が中心となって行われた青森県二戸郡田子(たっこ)町石亀遺跡の調査に参加した。亀ヶ岡文化解明を目的とする学術調査で、渡辺門下の多くの学生たちが全国から集まった。青森県南端部に位置する亀ヶ岡文化期の遺跡調査に参加するという貴重な経験をすることができた。調査報告書は「青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究」(1997)という立派な装丁の本となっている。

大学院2年生となった4月、東京都世田谷区等々力一丁目に所在する御嶽山古墳の墳丘測量調査に参加した。理工学部測量実験室(遠藤源助・山本宏先生)の指導のもと、はじめてトラス測量を実施することができた。墳丘径約45m、高さ約5mの円墳であった。

5月下旬に入って櫻井清彦先生が実施した青森県青森市造道(ぞうどう)沢田A遺跡の第2次調査に参加した。擦文土器を伴う竪穴住居址の調査であったが、水田脇の遺跡で、調査すると水田の水が滲みだして水没してしまうありさまで調査に難儀することとなった。



▲「御射山」(1968, 学生社刊)表紙

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月~1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月~2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英次記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月~2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 236

特別史跡・特別名勝 平城京左京三条二坊宮跡庭園 ～奈良県奈良市—— 池田 裕英

平城京左京三条二坊宮跡庭園は奈良時代の発掘庭園で、平城京の条坊復原では左京三条二坊六坪に位置します。出土遺物・遺構から平城宮の離宮もしくは皇族等の邸宅(宮)であった可能性が考えられ「宮跡庭園」と名付けられました。発掘された園池遺構を露出展示し、公開していて、奈良時代の意匠・作庭技法を知ることができる貴重な庭園です。遺構が他に類例のない規模であるだけでなく保存状態も良く、わが国における庭園の成立や展開を考えるうえで極めて高い価値があることから1978年に国の特別史跡に、1992年には特別名勝にも指定されました。

宮跡庭園は1975年に郵便局建設の事前の発掘調査により発見され、庭園は奈良時代中頃に作られたと考えられています。園池は六坪の中央に位置し、ここが園池を中心とした施設であったことが窺えます。

園池は石で構成され、全長55m、幅2～7mの曲池です。旧流路を利用して作られ、池底に粘土を敷き、その上に径20～50cmの扁平な石を敷いています。汀に列状に玉石を並べて池の輪郭を作り、玉石列の外側は緩やかな勾配で礫を敷いて洲浜状に仕上げています。池が屈曲する要所要所には大きな自然石の石組を配し、池底の二か所に水生植物を植えたと思われる木製柵を据えています。池の形は龍の姿を模したとする説や吉野の宮瀧付近の吉野川の形を写したとの説があります。

園池の西側には建物が建てられ、池や東の山々を眺めたものでしょう。曲池、自然石を用いた石組、礫敷の洲浜は平安時代以降の庭園に多くみられる要素で、方形の池、加工を施した石造物、垂直の護岸が特徴的な飛鳥時代の庭園とは顕著な違いがあります。この点からみて宮跡庭園は平城宮東院庭園とともに日本庭園の祖形といっても過言ではないと思われます。

遺跡はその重要性から保存が決まり、当初計画された郵便局は別の場所で建設されることとなりました。1979年～1985年にかけて景石の保存処理をはじめとした保存整備工事が行われ、その後一般公開されました。

公開から20年が経過した頃から復元建物の屋根の傷みや園池の石に亀裂や破損がやや目立つようになり、2007年度から

建物の檜皮の葺き替え、景石の保存処理等の修復・再整備を行いました。整備した遺跡の全面的な再整備として嚆矢になると思われれます。特筆すべきこととして景石の保存処理に関し、初回整備では石が据えられた現位置で処理を行いましたが、今回は再整備に係る委員会で石の状態や処理方法、工法などを検討・議論した結果、景石を取り上げて別の場所で処理した後に再設置することとした点があげられます。取り上げと再設置の際はレーザ測量を行い、その誤差を10mm以内に収めました。再整備事業は15年の歳月を有し、2020年度から全園再開園しています。

宮跡庭園のこの曲がりくねった池で所謂「曲水の宴」が行われたであろうことは容易に想像されます。それを示す史料はないのですが、この数年、春、梅が咲く頃に古代衣装を愛好するグループの方が各々その衣装を身に纏い「梅花の宴」の再現を楽しみに来られています。楽器を奏でて舞を舞ったり、再現した古代菓子を味わったりと、当時の宴の情景が髣髴されます。

また、現在は背後の高層建築を隠すための植栽に遮られています。往時、園池西側の建物から池の向こうに御蓋山をはじめ春日の山々、東大寺や興福寺の堂塔が望めたはずです。いま、夕暮れ時に復元建物に上がってその縁に立ったとき、上述のようにこの池が宮瀧付近の吉野川を写した可能性があることを思い起こすと、とある夜、人生の秋を迎えた一人の貴顕が御蓋山に出でし月を愛でつつ盃を傾け、池を眺めながら若き日に天皇のお伴をして訪れた吉野・宮瀧を思い浮かべている、といった姿を想像したくもなります。

この場に身を置いたとき、過去が自らの中に甦ってくる感覚を覚えるような空間であるにはどうすればよいか、整備や管理に関わる一人として重い課題だと思っています。

宮跡庭園は平城京跡の長い発掘調査史の上でも、開発から守られた唯一の事例といつてよく、その意味でも重要な遺跡です。その保存・整備・再整備・現在の維持管理、見学・活用して楽しんで下さっている人たちの思いが重なり連なっていることを感じる平城京左京三条二坊宮跡庭園を私のマイ・フェイバレット・サイトとして紹介させていただいた次第です。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは奥井智子さんです。



▲復元建物から見た園池(西から)



▲「梅花の宴」再現風景



▲景石と復元建物(北東から)

考 古学者の書棚

「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 -松本市内その1- 総論編」

青沼博之・石上周蔵・小口徹・小平和夫・野村一寿・望月映／長野県埋蔵文化財センター(1990) — 直井 雅尚

概略

長野県埋蔵文化財センターが行った長野自動車道(当時の名称は中央自動車道長野線)建設に伴う松本市内の発掘調査で、対象となった10遺跡を6冊の本編にまとめ、それらの総合的な考察を行ったのが「松本市内その1-総論編」(以下「本書」と略記)です。1990年に刊行されました。10遺跡の総調査面積279,630㎡、検出遺構は古代だけで竪穴建物958棟という膨大なもので、その成果を総合して分析し実質300頁にまとめています。特に第3章5節「古代の土器」で示された土器の器種分類、型式変化、土器群の変遷と段階区分、年代観、そして古代の土器の捉え方、これらは基本的に調査対象だった松本市域の奈良井川西岸域遺跡群について述べられたものですが、以後、長野県内で古代の土器を分類、分析する際の指標になったと言えるでしょう。その後刊行された同時期の巨大集落や官衙遺跡の報告(県埋文1993高速道屋代遺跡群、飯田市教委2005恒川遺跡群、岡谷市教委2008榎垣外官衙遺跡など)で本書の土器の捉え方、器種分類や時期区分が踏襲されていることがそれを示しています。東海産須恵器や灰釉陶器の年代観の変化に伴う若干の修正が提案されながら現在に至っています。

総論編に至るまで

中信地区では本書以前に古代の土器についてお手本となる文献はほぼ皆無。もちろん古くは平出遺跡や郡・市史がありますが、学史としてではなくダイレクトに土器の整理や報告、研究に応用できるものではありませんでした。中南信でみても時期区分や年代観が示されたのは岡田氏の論考(岡田1977)、報告書では箕輪町の中道遺跡(伴1974)、諏訪市の十二ノ后遺跡(笹澤1975)くらいでした。1980年ころからは中信地区でもほ場整備に伴う大規模な発掘が始まり次々と古代の集落が検出されて、その報告書作成が急務となります。しかし、多数の竪穴建物すべてを奈良・平安時代で一括し、須恵器坏Bがあれば奈良、灰釉陶器があれば平安中・後期(当時、榑崎氏の灰釉の年代観に疑義が呈されていました)という程度の理解しかなかったのが正直なところです。もっと細かい時間軸の物差しが欲しい。若手の担当者たちはそんな思いに駆られ、種々の試みも行ないました。1984年からは長野自動車道の発掘調査が松本平でも始まり、予想通りに古代の大集落が次々と現れました。現場終了後には整理が行われ、担当者の多くはそのまま携わって1988年から報告書の刊行が始まりました。特に1989年刊行の「吉田川西遺跡」は、古代の土器の把握に種別を越えた器種の組み合わせを用いることを明示し、14段階の時期区分を行うなど、本書に先駆けた優れた内容を持つものでした。

優れていたと思う点 その1

本書の土器の論考で優れていた点を列挙します。最も普遍的に見られる坏Aの変化を基準に据えて時間軸を設定したこと。焼き物の種別(土師器・須恵器など)と器種の間に特定の

組み合わせがあることを明らかにしたこと。およそ集落遺跡から出土するほとんどの土器の器種設定を行い、それらの型式変化と変遷を示したこと。そして、7世紀末から11世紀までを間断なく連続する15の時期に区分して、各時期の指標と年代観を示したこと、などです。加えて畿内や都城、東海地方の研究成果を積極的に取り入れ、地域の土器研究に新たな視点をもたらしました。多くの担当者たちが以前からおぼろげに考えていたことに確かな方向性を与え、系統的に整理し明文化したことが重要だったと思います。

優れていたと思う点 その2

別の面からも優れた点を挙げます。まず、何と言ってもコンパクトであったことです。この種の論考は分厚い報告書に付随するため、どうしても図書としての扱いは重荷となりますが、本編とは別に一冊にまとめたので、とても利用しやすくなりました。次に、各報告間で統一がとれていたことです。巨大発掘の報告は完結までに時間がかかり、また担当者の交代などで本編と考察に内容や表現の齟齬、重複が起こりがちですが、それがほとんど感じられません。そしてきわめて系統的、計画的に章立てと記述が行われた点も挙げられます。担当者の専攻や思い入れで特定の部分が肥大したり、発見時の熱が冷めたかのような扱いはなく、触れるべきところを洩れなく(そつなく)触れている。論考の内容とは異なる次元でみても本書が活用された理由がわかる気がします。

追加の感想

本書が扱った遺跡はいずれも弥生・古墳などの古い時代との著しい重複がなく、古代の分析に最適であったことは見逃せません。それに長野県埋蔵文化財センターという準県営組織が調査から報告まで携わった成果、力量を示したとも言えるでしょう。しかし、本書以後の同センター刊行の報告書すべてが本書に匹敵したか、という問いへの返答に私は若干の躊躇を覚えます。遺跡、組織体制、従事した個々人、そして時代、そんな様々な要件が奇跡的に揃った結果の産物が本書だったのかも知れません。

本文中で触れた主な文献は以下のものです。

- 伴信夫1974「中道遺跡 まとめ」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-上伊那郡箕輪町-昭和48年度』長野県教育委員会
 笹澤浩1976「十二ノ后遺跡 奈良・平安時代の土器について」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-諏訪市その4-』長野県教育委員会
 岡田正彦1977「平安時代土師器等の編年試論-特に長野県中南信地方の住居址出土土器を中心として-」『信濃』29-9
 原明芳1989「吉田西遺跡にみられる食器の変容」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3-塩尻市内その2-吉田川西遺跡』

アルカ通信 No.243

発行日 2023年12月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL:0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL: http://www.aruka.co.jp